

◎ 美術館情報

最新の情報は、各施設の公式ホームページなどでご確認ください。

1. 瀬戸市美術館【愛知・瀬戸】(<http://seto-cul.jp/information/index.php?s=1688881763>)

8月5日(土)～10月1日(日)

特別展： 磁祖加藤民吉没後 200 年プレ事業 瀬戸市美術館特別展

「瀬戸染付開発の嫡流―大松家と古狭間家を中心に―」

瀬戸における磁器開発を主に担っていたのが、加藤吉右衛門・民吉に代表される「大松家」と、加藤忠治に代表される「古狭間家」と言えます。この両家は、瀬戸の陶祖である加藤四郎左衛門景正(藤四郎)からの家系である「山陶屋家」からの分家であり、同じくその家系からの分家として、加藤唐左衛門の「唐左衛門家」もあります。また、陶祖からの家系として「武右衛門家」があり、「山陶屋家」と「武右衛門家」が当時の瀬戸を代表する陶祖からの家系でした。本展では、「大松家」と「古狭間家」という初期瀬戸染付を語る上では欠かせない二つの家系等に関連する作品を展示するとともに、民吉が修業した長崎県佐々町の窯跡から採集された陶片などを展示し、当時の瀬戸染付発展の状況を知っていただければと思っております。また令和 6 年(2024)に、民吉が没してから 200 年という節目の年を迎えますので、本展により民吉の偉業を再認識するきっかけとなれればと考えています。

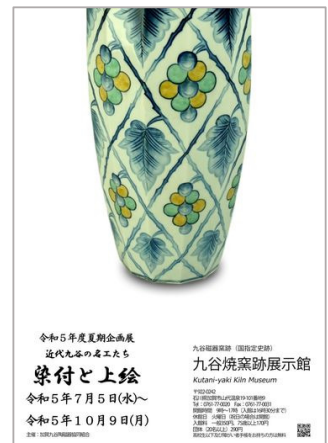


2. 九谷焼窯跡展示館【石川・加賀】(<https://kutani-kamaato.com/kikaku/>)

7月5日(土)～10月9日(月・祝)

企画展： 令和 5 年夏期企画展「近代九谷の名工たち」～染付と上絵～

伝統的な陶芸の絵付けとして、二つの技法が知られています。一つは「上絵付」、そしてもう一つは「下絵付」と呼ばれています。では「上」と「下」を区別しているものは一体何でしょう。それは、器の表面に焼き付いている「釉薬」と呼ばれるガラスの膜―これを境界面として区別します。釉薬の下に絵付けを施す技法を「下絵付」と呼び、中でも「染付」は、釉薬を透して見える様々な藍色の表情が、日本人の感性によく合いました。一方の「上絵付」は、釉薬の表面に更に絵付けを施し焼き付けることから、色彩が非常に鮮やかに発色します。九谷焼では草創期の「古九谷」の時代から、江戸時代後期の「再興九谷」、そして近代へとその両方の技法が伝えられてきました。全く異なる技術を要する二つの絵付けを駆使し、器の豊かな装飾表現を目指した再興九谷・江沼諸窯の陶工たちの作品をご紹介します。



3. 富山市ガラス美術館【石川・富山】(<https://toyama-glass-art-museum.jp/exhibition/exhibition-5554/>)

7月8日(土)～10月9日(月・祝)

企画展： 日本近現代ガラスの源流

明治以降、国内では洋式ガラス製法が普及し、幅広いガラス製品が生産されるようになりました。そうした中、自らの表現としてのガラス制作に取り組み、芸術としてのガラスの地位向上に奮闘したのが岩田藤七と各務鑛三でした。その後、ガラスによる独自の表現を追求する作家は次第に増えていきました。本展では、1870 年代から 1970 年代前半までのおよそ 100 年の動きを追いながら、それぞれの時代を切り開いてきた作家達による創造性豊かな作品やプロダクト・デザイン、そして当時の関連資料を紹介し、今日にいたる日本の近現代ガラス芸術の源流を探ります。



4. 多治見市美濃焼ミュージアム【岐阜・多治見】／ 中津川市苗木遠山資料館【岐阜・中津川】

9月2日(土)～令和6年1月28日(日)

企画展「没後 100 年 成瀬誠志とその周辺」



本展覧会は東濃地域を舞台にして、地域の両端に位置する中津川市と多治見市が、陶業技術について特筆すべき先達から学び、文化的連携をはかることを目的として企画・立案しました。

明治中期の岐阜県東濃地方東部の陶磁器業界は現在の多治見市を含む土岐郡、可児郡と中津川市を含む恵那郡、これら3つの郡をひとまとめにしていました。現在のように商業組合や工業組合などと分かれておらず、「三郡」と呼ばれる1つの大きな組合だったのです。

本展覧会は現在の美濃焼の定義を再解釈し、明治時代に活躍した名工 成瀬誠志(なるせせいし)の没後100年を記念し、中津川市とともに多治見市でもその功績を振り返り、美濃焼の中での位置づけを改めて試みるものです。

そして、作品は中津川市苗木遠山史料館と当館の2館で展示するとともに、企画展のために作成するハンドブックは、中津川市の学芸担当に研究成果の執筆を依頼し、共同で作成します。

成瀬誠志は弘化2(1845)年、美濃国恵那郡茄子川村(現在のの中津川市茄子川)に生まれました。名は和六といい、13歳の頃、地元の茄子川焼の篠原利兵衛の徒弟となります。明治4(1871)年に東京へ移り、陶画工となります。翌年には芝区の増上寺山内に窯を構え、薩摩焼風陶器の絵付けを本格的に始めました。当時、幕末から欧米で好まれたジャポニスム・日本趣味の流行を受けて、いわゆる「東京薩摩」と呼ばれた誠志

の作品は主に横浜から海外へ輸出されました。明治10(1877)年に開催された第一回内国勸業博覧会での受賞を皮切りに、精密な絵付けは国内外の博覧会で入賞するなど高い評価を受けました。

明治19(1886)年に、より本格的な制作の場を求めて茄子川へ帰郷し、工房「陶博園」を開設します。特に帰郷後、日光東照宮をモデルに制作した「陽明門」は約3年の歳月をかけた大作でした。この作品は明治26(1893)年アメリカ・シカゴ万国博覧会に出品した際、輸送中の事故により破損しその一部の展示にも関わらず、多くの賛辞を得て受賞します。

本展では、東京で制作した「東京薩摩」を中心に、地元茄子川に帰郷して取り組んだ大作「陽明門」をあわせて展示します。アメリカの日本陶磁収集家 E・モースから「薩摩焼風陶器の細密画の元祖」と紹介され、生涯にわたって自身の美を追い求めた誠志の世界を時代背景とともにご紹介いたします。

<多治見会場> (https://www.tajimi-bunka.or.jp/minoyaki_museum/guide)

多治見市美濃焼ミュージアム(多治見市東町1-9-27) ギャラリーM1

TEL:0572-23-1191

<中津川会場> (<https://www.city.nakatsugawa.lg.jp/museum/t/exhibits/index.html>)

中津川市苗木遠山史料館(岐阜県中津川市苗木2897-2) 2階展示スペース

TEL:0573-66-8181